

平成30年4月12日(木)

老球の細道405号

改めてコーチのリスクマネジメント

会津バスケットボール協会 室井 富仁

何かと問題の多い大相撲協会で、開いた口がふさがらないようなアクシデントが起きた。大相撲の春巡業の京都舞鶴場所で、「女人禁制」の土俵上で倒れた舞鶴市長の救命措置をした女性に、行司が土俵から降りるようアナウンスをしたという。

以前から大相撲界にはわけのわからない伝統とか品格というのがあって、おかしいなあと思ってきたがやはりおかしかった。人命より「女人禁制」、相撲も終わってしまった。

そもそも女人禁制は、協会の資料によると「女子は土俵に上がれない。固く禁じられている。理由は土俵は神聖なる場所であるため、このしきたりは勸進相撲当初より守られている」とある。そのような神聖なる場所に懸賞金の垂れ幕が上がるのはOKなのか？ちょっと負けがこむと、すぐに休場してしまう横綱の品格は本物なのか？「品欠く」なのか？

「塩撒いて恥の上塗りする土俵」「親方も行司も女人から生まれ」（朝日川柳より）

くも膜下出血で倒れた市長さんは、女性の機転の利いた救命措置のおかげで無事手術を終え、経過は良好だという。もし胸骨圧迫を施していた女性看護師が土俵から降りて、救急隊員が来るまで空白の時間ができてしまったらどうなっただろう。心停止状態になってから2～3分間の行動が救命を決定する。

大相撲のわけのわからない伝統と品格を批判するより、今回の一件で想定外の事故に対して改めて危機管理は十分なのか気づかされた。Bリーグにおいても、先日試合を観戦していた観客が心停止を起こした事故があったようだ。Bリーグ本部からも各チーム、ディレクターに緊急事態発生（北朝鮮のミサイルや大地震だけでなく人命の危険）時における危機管理体制について改めて徹底させるようメールで連絡が来た。

私も今まで体育授業と部活動の現場で何度か生徒の重大な事故に遭遇したことがある。運よく生命に影響するまでにはいかなかったが1歩間違えば死に至る可能性があったかもしれない。その中で最も危なかったのは30年以上前の原町高校時代の夏合宿だった。当時は熱中症というのはまだ認知されない時代で、猛暑の中でランニングパスを続けているうちに選手が意識を失って倒れてしまった。心停止もしていたので119番にすぐに連絡し、私は生まれて初めて心臓マッサージ（胸骨圧迫）を施した。保健の授業でちょうど教えていたので、理論的にはわかっていたが実技の経験はなかった。緊急事態なので思いきって5、6回押したら心臓が動きだした。あの時の安堵感は今でも忘れられない。

スポーツの現場では指導者の安全配慮義務が問われる。安全配慮義務とは「指導者は選手に対して安全にスポーツが行えるように配慮する義務がある」。通常、スポーツ現場の事故は、原則自己責任であるが、安全配慮を怠ると指導者の責任が問われることがある。スポーツの現場では特に「トリプルH」に対応できるように準備せよと言われる。①Head（脳震盪などの頭のケガ）②Heat（熱中症）③Heart（心臓疾患）。いずれも生命に関わる事故である。

何ごととも想定外のことは起こり得る。天国と地獄は紙一重、生と死は裏表なのが人生。もし事故が起こったら、「救命の連鎖」①119番への連絡②人工呼吸（CPR）&胸骨圧迫④AEDが大切な人の命を救う。練習も試合も、いざという時も準備あるのみ。